



他者の気持ちを想像する傾向ならびに間接的愛着行動とストレスの認知的評価の関連：
共分散構造分析を用いた検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 円香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017621

他者の気持ちを想像する傾向ならびに 間接的愛着行動とストレスの認知的評価の関連 —共分散構造分析を用いた検討—

中村 円香

1. 問題と目的

不快な感情をとまなう状況では、他者に頼り、心を触れ合わせることが気分をやわらげることもある。しかし、現代の青年については、土井（2008）が「優しい関係」と称したように、周囲の反応を敏感に察知しつつ、他人や自分の世界を傷つけないようにするという関わり方があり、その在り方のために、自身が困った時に他者に助けを求めるといった対処行動についても、特徴的な様相を示すのではないかと考えられる。本研究では、青年において、安心したい気持ちを適切に伝えられない行動として、間接的愛着行動に注目する。

中尾・加藤（2001）によれば、成人における愛着行動は「人が身の危険を感じたり、自分が大切だと感じているものが傷つけられたりするとき、主体はネガティブな感情を体験し、そのネガティブな感情を解消するために、他者と何らかのかかわりをもとうとすること、またはその意図にもとづき実際のやりとりをおこなうこと」と定義される。また、成人における愛着行動は直接的愛着行動と間接的愛着行動に分類される（中尾・加藤、2006）。中尾・加藤（2006）によれば、前者は安全欲求を直接的に伝えられる行動で、後者は対他調整（愛着行動を行う際の、自他の適切な心理的距離の調整）を過度にしてしまうために、安全欲求を適切に伝えられない行動であるとされる。また、中尾・加藤（2006）によって間接的愛着行動は「すねた伝達」と「他者への懸念」という2因子構造が確認されている。前者は「他者が自分の期待と違った反応をするので、すねた素振りを見せることで他者の反応を引き出しながら行う甘え的要素を含んだ愛着行動」と定義され、後者は「他者に自分の気持ちを素直に伝えたいが、その一方で他者に自分の本心やプライベートな側面を知られたくないために、それを抑制しながら行う愛着行動」と定義される。このような、自他の心理的距離を適切に調整することにとられるという特徴は、現代の青年が、不快な感情を伴う状況に置かれた際の対処行動やそれに伴う感情について考える上で有用な概念であると考えられる。

幼児と異なり、成人の愛着行動に関与する要素は

様々に考えられる。特に、成人の愛着行動を特徴づけている対他調整という要素に関連するものとして、共感性が考えられる。共感について、登張（2003）は、「他者の体験する感情を見た側に、それと一致した（苦痛に対して苦痛など）、あるいはそれに対応した感情的反応（苦痛に対して、かわいそう、心配するなど）が起こること」と定義している。登張（2003）の調査では、共感性は「共感的関心」「個人的苦痛」「ファンタジー」「気持ちの想像」の4因子が見いだされているが、この中でも特に「気持ちの想像」は、主に「他者の視点、立場にたって気持ちを想像する」という内容であるため、間接的愛着行動を行う前の、過度な対他調整との関連が考えられる。つまり、他者の感情や状況を推察し、自分の行動に対する反応を想像することと、間接的愛着行動のような、すねたそぶりや、感情の素直ではない表出（または抑制）との関連が考えられる。また、間接的愛着行動は、愛着対象と自身との心理的距離の調整にとられることで、間接的に安全欲求を表現する（してしまう）行動であるために、本来の安全欲求が対象に伝わりにくく、フィードバックがあっても満足できなかつたり、自身の愛着行動について不快感を抱くことで、かえってその状況や行動の結果をストレス状況であるにとらえ、否定的な認知的評価をする可能性が考えられる。そのため、間接的愛着行動を行うことは、愛着行動の結果に対する否定的な認知的評価と関連すると考えられる。

これらのことから、「気持ちの想像」が間接的愛着行動を通して、間接的にストレスの否定的認知と関連をもつというプロセスが考えられる。そこで本研究では、「気持ちの想像」が間接的愛着行動を通してストレスの認知的評価と否定的な関連をもつというモデルを検証することを目的とする。具体的には、以下の仮説を検証する。

（仮説1）気持ちを想像する傾向は、間接的愛着行動と正の関連をもつ。

（仮説2）間接的愛着行動を行う前のストレスへの認知的評価が、間接的愛着行動を媒介し、その後のストレス状況への認知的評価や間接的愛着行動に対する認知的評価の間に否定的な関連をもつ。

2. 方法

目的に沿って、大学生を対象とした個別自記入形式の質問紙調査を実施した。調査対象者は、大学生1～4年生、大学院生計155名。性別の内訳は男性30名女性123名その他2名で、平均年齢は20.26歳である。全回答者155名のうち、欠損があるデータ5名を省いて、最終的に150名が有効回答者となった。(男性29名女性119名その他2名、平均年齢20.23歳、SD=1.30)。調査時期は2020年11月6日～12月10日であった。質問紙調査では、回答依頼時に、文書と口頭で回答は強制ではないことを説明し、合意を得た。

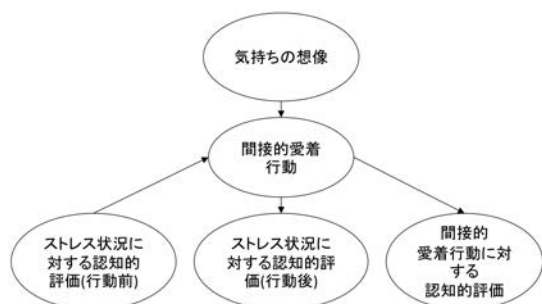


図1 間接的愛着行動に関する仮説モデル

2.1 質問紙

質問紙は表1に示すように、Q1.～Q5.から構成されていた。

表1 質問紙の構成

1. フェイスシート
2. 気持ちの想像 (Q1)
3. ストレス場面に対する認知的評価 (Q2) (加藤, 2001)
4. 間接的愛着行動 (Q3) (中尾・加藤, 2006)
5. 間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価 (Q4) (加藤, 2001)
6. 間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価 (Q5) (加藤, 2001)

① フェイスシート

大学・所属学部・性別・年齢の記入を求めた。

② 「気持ちの想像」(Q1)

登張 (2003) が作成した多次元共感性質問紙からの抜粋である (表2)。「共感的関心」「個人的苦痛」「ファンタジー」「気持ちの想像」の4下位尺度からなり、青年期の共感性について多次元的に検討することが可能であるが、本研究では間接的愛着行動との関連が考

表2 気持ちの想像の質問項目

1. 誰かを批判するより前に自分がその立場だったらどう思うか想像する。
2. 怒っている人がいたらどうして怒っているのだろうか想像する。
3. 友達の間からは物事がどう見えるのだろうか想像し理解しようとする。
4. 誰かに対し腹が立ったらしばらくその人の立場に立ってみようとする。
5. この人は不安なのだなどというように、人がどう感じているかに敏感なほうだ。

えられるため、他者の気持ちや状況を想像する「気持ちの想像」因子を採用した。全5項目それぞれについて「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

③ 「ストレス場面に対する認知的評価」(Q2)

加藤 (2001) が作成した認知的評価尺度を用いた (表3)。あるストレス場面を想像してもらい、その場面に對して回答するよう教示した。「対処効力感」「脅威」「重要性」の3下位尺度からなり、項目は4項目 (対処効力感), 3項目 (脅威), 2項目 (重要性) の全9項目である。9項目それぞれについて「よくあてはまる」～「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。教示は以下のものであった。「ストレスがかかるような場面を1つ思い浮かべてください。その後、以下の質問を読み、あなた自身にもっとも当てはまるものを選んでください。(ストレス場面の例…自分が失恋した時、自分が病気やケガをしたときなど、「不安」「悲しみ」「落ち込み」「恐れ」「ストレス」やこれらのいくつかがまざりあったようなマイナスの感情を体験するような場面)」

表3 ストレスの認知的評価

1. ストレスの原因をうまく解決できる
2. そのストレスをうまく解消できる
3. 自分の望み通りの結果が得られるように、そのストレスに対してうまく対応できる
4. その状況を変えることができる
5. 自分にとって苦痛なことだと思う
6. 自分にとって、わずらわしいことだと思う
7. 自分にとって負担になることだと思う
8. 自分にとって重要なことだと思う
9. 自分に、重要な影響を与えるものだと思う

④ 間接的愛着行動 (Q3)

中尾・加藤 (2006) が作成した成人愛着行動尺度 (AABS:Adult Attachment Behaviors Scale) からの抜粋を、想定した場面に対する回答として適切な形に改変した (表4)。中尾ら (2006) は成人が行う愛着行動を間接的愛着行動と直接的愛着行動に分類し、AABSを作成した。AABSは「すねた伝達」「他者への懸念」「近接性維持」「素直な伝達」の4因子からなり、成人が行う愛着行動を間接的愛着行動と直接的愛着行動から検討することが可能である。本論文では、間接的愛着行動を表す「すねた伝達」と「他者への懸念」を採用した。項目はそれぞれ6項目の全12項目である。12項目それぞれについて「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。教示は以下のものであった。「先ほど思い浮かべてもらったようなストレス場面では、人は、マイナスの感情を、誰かのところへ行って解消しようとするのがよくあります。そのような誰かに頼ろうとした状況で、あなたは以下に

表4 間接的愛着行動の質問項目

1. 相手が自分の想像したような手助けをしてくれないと、つつい相手は八つ当たりをしてしまうだろう。
2. 相手が真剣に励ましてくれていないと思うと、少しすねたそぶりを見せるだろう。
3. 思いどおりに相手から共感を得られないと、つつい相手に八つ当たりをしてしまうだろう。
4. 相手がこれ以上話をしたくないそぶりを見せると、私はつつい不機嫌な顔をするだろう。
5. 相手が真剣にアドバイスをしてくれていないと感じると、少しいじけたそぶりを見せるだろう。
6. 相手に自分の気持ちを聞いてもらいたいときに、相手が今いそがしいと言うと、少しふてくされてみるだろう。
7. 今かかえている問題を一緒に考えてほしくても、なかなか言い出せないだろう。
8. 自分の気持ちを受けとめてほしいが、相手に迷惑がかかるかもしれないので、なかなか言い出せないだろう。
9. 相手と一緒にいたい、そのことを相手に伝えることに抵抗があるので、なかなか言い出せないだろう。
10. 相手に手助けしてほしいことがあるとしても、相手がイヤな顔をするかもしれないと思い、手助けを求めないだろう。
11. 共感してほしいとは思いますが、相手に悪いと思い、なかなか自分の気持ちをうちあげないだろう。
12. 相手に手助けをしてほしいが、そのことをうまく表現することができないだろう。

挙げてある行動をどのくらい行うと思いますか。以下の質問を読み、あなた自身に当てはまるものを選んでください。」

⑤ 「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に
対する認知的評価」(Q4)

「ストレス場面に対する認知的評価」(Q2)と同様に、加藤 (2001) が作成した認知的評価尺度を用いた。間接的愛着行動を行った後で、Q2で想定したストレス場面に対してどう思うか回答するよう教示した。教示文は「先ほどのような、マイナスの感情を誰かのところへ行って解消しようとする行動を行ったあとで、あなたは「思い浮かべたもとのストレス場面」に対してどう思いますか。あなた自身に当てはまるものを選択してください。」であった。

⑥ 「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動
に対する認知的評価」(Q5)

「ストレス場面に対する認知的評価」(Q2)と同様に、加藤 (2001) が作成した認知的評価尺度を用いた。間接的愛着行動を行った後で、その間接的愛着行動や、間接的愛着行動の結果に対してどう思うか回答するよう教示した。教示文は「先ほどのような、マイナスの感情を誰かのところへ行って解消しようとする行動を行ったあとで、「自分自身のその行動や、行動の結果のストレス」に対してどう思うか、あなた自身に当てはまるものを選択してください。」であった。

3. 結果

3.1 尺度の因子分析結果

本研究で使用した尺度の得点分布と信頼性係数を、表5に示す。それぞれの因子を区別するために、Q2で回答されたストレスへの認知的評価（「ストレス場面に対する認知的評価」）の因子名をそれぞれ、「対処効力感①」「脅威①」「重要性①」と表した。また、Q4で回答されたストレスへの認知的評価（「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価」）の因子名をそれぞれ「対処効力感②」「脅威②」「重要性②」と表した。そして、Q5で回答されたストレスへの認知的評価（「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価」）の因子名をそれぞれ「対処効力感③」「脅威③」「重要性③」と表した。

(1) 他者の気持ちや状況をどのくらい想像するかについで5項目について、一次元性の確認を行った。「あてはまる」～「あてはまらない」まで得点化し、主成分分析による分析を行った。分析の結果、第一主成分の負荷量の絶対値はいずれも.56以上となり、寄与率

表5 発達に関する30項目

尺度名	n	項目数	得点		α係数
			平均値	SD	
共感性	150	5	3.91	1.039	.712
ストレスの認知的評価	150	4	2.07	.819	.890
	150	3	3.20	.816	.824
	150	2	2.76	.953	.757
間接的愛着行動	150	6	3.53	1.619	.890
	150	6	4.44	1.717	.918
ストレスの認知的評価	150	4	2.29	.894	.898
	150	3	2.89	.909	.897
	150	2	2.84	.948	.836
ストレスの認知的評価	150	4	2.34	.916	.937
	150	3	2.82	.895	.878
	150	2	2.83	.943	.898

は47%であった。5項目のα係数は.712であった。よって表2の5項目は一次元構造であることが確認された。この結果に基づき、5項目の得点の平均値を、「気持ちの想像」得点とした。この得点が高いほど他者の気持ちを想像する程度が高いことを示す。「気持ちの想像」得点の平均は3.91点であった。

(2) 「ストレス場面に対する認知的評価 (Q2)」の9項目について。「よくあてはまる」～「あてはまらない」を得点化し、平均値を算出した。これらのストレスへの認知的評価に関する9項目について因子分析 (主因子法, プロマックス回転) を行った。その結果, 先行研究と同様に「対処効力感」(α=.89) と「脅威」(α=.82) と「重要性」(α=.76) の3因子構造を確認でき, 信頼性も概ね認められた。

なお, 「ストレス場面に対する認知的評価」(Q2) と同尺度を用いた, 「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価」(Q4) ならびに「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価」(Q5) においても同様の手続きで因子分析を行った結果, Q2と同様の3因子構造が確認され, 信頼性も概ね認められた。

(3) 間接的愛着行動についての12項目について。「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」まで得点化し, 平均値を算出した。これらの間接的愛着行動に関する12項目について先行研究 (中尾・加藤, 2006) に倣い因子分析 (重みなし最小2乗法・プロマックス回転) を行った。その結果, 先行研究と同様に「他者への懸念」(α=.89) と「すねた伝達」(α=.92) の2因子構造を確認でき, 信頼性も概ね認められた。

3.2 共分散構造分析

3.2.1 パス図の構築

「問題と目的」で述べた仮説から, 「気持ちの想像」が間接的愛着行動を経由してストレスの認知的評価に与えるパスの流れを想定し, 各尺度の得点の合計を観測変数として, モデルの構築を試みた。具体的には, 「気持ちの想像」が間接的愛着行動を経由し, 「ストレス場面に対する認知的評価」(Q2), 「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価」(Q4), 「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価」(Q5) に与えるパスの流れと, 「気持ちの想像」が間接的愛着行動を経ずに「ストレス場面に対する認知的評価」(Q2), 「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価」(Q4), 「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価」(Q5) に与えるパスの流れ, そして, 「ストレス場面に対する認知的評価」(Q2) が (間接的愛着行動を経ずに) 「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価」(Q4), 「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価」(Q5) に与えるパスの流れを想定しつつ, 変数間にパスを引いた。有意ではないパスを削除し, 当てはまりがよいモデルを採用した (図2)。具体的には, GFI=.972であり, AGFI (=.925) はGFIとの差がややひらいたものの, 目安となる0.9以上の値であったことと, RMSEA=.00であり, 当てはまりがよいとされる.05を下回っていたことから, 適合度が概ね良好であると判断し, このモデルを採用した。また, Q4, Q5ともに間接的愛着行動をしたあとでどう認知的評価をするか, という内容であるが, Q5で

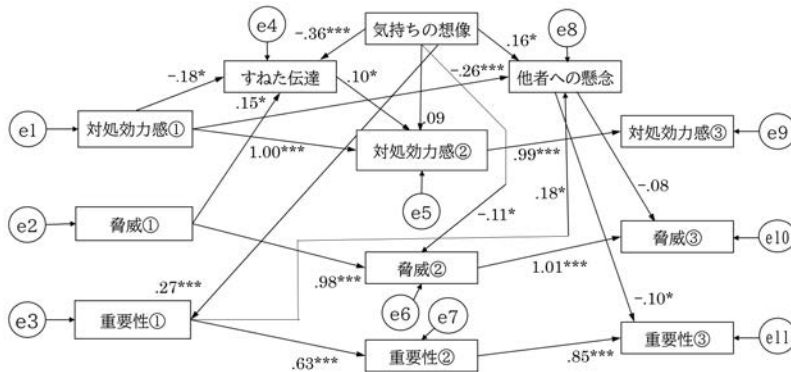


図2 気持の想像が間接的愛着行動とストレスの認知的評価に与える影響

GFI=.972 AGFI=.925 RMSEA=.000

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

の間接的愛着行動の結果についての認知的評価には、Q4での認知的評価が先行し、パスの流れが考えられたため、Q4が先で、Q5が後というモデルとなっている。なお、誤差変数の共分散は省略している。矢印は有意なパスを示し、数値はパス係数を示す。

3.3 間接的愛着行動へのパスについて

3.3.1 「気持の想像」から間接的愛着行動へのパスについて

「気持の想像」からは、「すねた伝達」と「他者への懸念」という「間接的愛着行動」の2因子双方へのパスがみられたが、それぞれ正負が異なっていた。「気持の想像」から「間接的愛着行動」の2因子につながるパス係数をみてみると、まず、「気持の想像」から「すねた伝達」へは、有意な負のパスが示された(-.36)。しかし、「気持の想像」から「他者への懸念」へは、大きな値ではないが、有意な正のパスが示された(.16)。このことから、他者の気持ちを想像する傾向が高くなるにつれて、「すねた伝達」が低減すること、また、「他者への懸念」が増すことが示唆されている。言い換えれば、他者の置かれている状況や他者が抱えている気持ちのイメージに乏しいほど、自分がストレス下に置かれた際に、思い通りにいかない相手の行為や接し方に対し、高い頻度で「八つ当たり」「ふてくされる」などといった行動傾向に向かうことが示唆され、また、他者の置かれている状況や、他者が抱えている気持ちのイメージが豊かであるほど、自分がストレス下に置かれた際でも、他者に助けを乞うことを憚る傾向に向かうことが示唆された。

3.4 間接的愛着行動を媒介している変数について

本節では、「間接的愛着行動」を媒介している変数について、総合的に記述する。以下、「すねた伝達」と「他者への懸念」それぞれについて述べる。

3.4.1 「すねた伝達」を媒介する変数

まず、「すねた伝達」には、「気持の想像」と「対処効力感①」から負のパスがみられ、「脅威①」からは正のパスがみられた。これは、他者の気持ちや状況を想像しない傾向や、「ストレス場面に対する認知的評価」においてストレスを脅威と感じる傾向、およびそのストレス場面を自分で解消できると思わない傾向が、「すねた伝達」の頻度を高めることを示唆している。次に、「すねた伝達」からは、「対処効力感②」に正のパスがみられた。これらから、「ストレス場面に対する認知的評価」における対処効力感認知（「対処効力感①」）が「すねた伝達」を媒介することで、「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価」における対処効力感認知（対処効力感②）を高めることを示唆している。これは「すねた伝達」が本来の成人の愛着行動の目的であるネガティブ感情の解消を部分的に果たす結果であると考えられる。しかし、「すねた伝達」から「脅威②」へのパス係数が非有意であったことから、「すねた伝達」の、愛着行動としての効果は、「すねた伝達」を行うことでストレスを脅威と感じなくなるということではなく（ストレス状況には脅威を感じるままであっても）、あくまでストレスへ対処できる自信のみ高められるというものに留まっているといえる。

3.4.2 「他者への懸念」を媒介する変数

次に、「他者への懸念」には、「気持の想像」と「重要性①」から正のパスが示され、「対処効力感①」か

ら負のパスが示された。そして、「他者への懸念」は、「重要性③」に対して、負のパスを示していた。これらは、第一に、他者の気持ちや状況を想像する傾向と、「ストレス場面に対する認知的評価」においてストレス場面に対して重要性を感じる傾向ならびに状況を自分で解消できると思わない傾向が、「他者への懸念」の頻度を高めることを表している。第二に、「ストレス場面に対する認知的評価」における対処効力感認知（対処効力感①）が「他者への懸念」を媒介することで、「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価」における、ストレス状況を重要と思う程度（重要性③）が低減することを表している。このことから、「他者への懸念」という愛着行動の抑制ともいえる行動傾向は、愛着行動の前にはストレス場面に対して重要と感じる傾向と関連があったにかかわらず、愛着行動の後にはストレス場面に対して重要と感じる傾向との関連は見られなくなり、さらに自分の行動の結果をストレス場面とした際、重要性を認知しにくくなることが示唆された。また、「気持ちの想像」から「他者への懸念」へは正のパスが示されたにも関わらず、「他者への懸念」から「対処効力感③」へは有意なパスが示されなかった。これは、他者に頼ることが憚られるという行動傾向と、「他者への懸念」の結果自体に対処可能であるという感覚とが関連しないことを表している。これらの結果は「他者への懸念」が本来の成人の愛着行動の目的であるネガティブ感情の解消を果たせないという可能性を示唆している。

3.5 間接的愛着行動を媒介しない変数の関連

「対処効力感①」から「対処効力感②」を経由し、「対処効力感③」に至る有意な正のパスが示された。また、「脅威」、「重要性」についても同様に①から③に至る有意な正のパスが示された。

4. 考察

4.1 仮説1について—「気持ちの想像」は間接的愛着行動とどのような関連を持つか

間接的愛着行動の二因子である「すねた伝達」と「他者への懸念」については、「気持ちの想像」から正負の異なるパスが示された（3.3.1）。このことから、仮説1は部分的に示されたといえる。

4.1.1 「気持ちの想像」から「すねた伝達」

「気持ちの想像」から「すねた伝達」には負のパスが示されたため、仮説1「気持ちの想像と間接的愛着行動とが正の関連を持つ」とは異なった結果になった。そもそも間接的愛着行動は、自他の適切な心理的

距離の調整にとらわれるため、安全欲求を間接的に表現する（中尾・加藤，2006）と定義されている。つまり、間接的愛着行動は相手の状況や気持ちを敏感に想像し、自分と相手との間の距離感に過度に注意した結果起こる（または、不本意ながらも起こしてしまう）行動といえる。しかし、本研究では間接的愛着行動の2因子のうち「すねた伝達」には、「気持ちの想像」から負のパスが示され、他者の気持ちを想像する傾向が高くなるにつれて、「すねた伝達」が低減することが示されたといえる。この結果は何を表しているのだろうか。

「すねた伝達」は、中尾ら（2006）によると、「他者が自分の期待と違った反応をするので、すねた素振りを見せることで他者の反応を引き出しながら行う甘え的要素を含んだ愛着行動」とされており、他者が自分の期待に応えるかどうかに対して敏感であることを前提としている。この点から、他者の反応を想像する傾向という意味で「気持ちの想像」との関連を想定した。しかしその行動は、他者の反応（自分の期待通りの反応）を引き出すことを目的としたものであるため、「すねた伝達」をされた人によっては、反応を引き出されることに不快感を覚えたり、負担に感じたりする恐れがある。「すねた伝達」の項目の例を挙げると、「相手が自分の想像したような手助けをしてくれないと、ついつい相手に八つ当たりをしてしまうだろう。」「相手に自分の気持ちを聞いてもらいたいときに、相手が今いそがしいと言うと、少しふてくされてみるだろう。」といったものがある。「すねた伝達」にみられる八つ当たり、ふてくされるといった行動は、相手が、期待した反応を示さなかったことに不満を感じるものの、アサーティブにその不満を伝達できない結果の行動である。「すねた伝達」がこのような甘え的要素を含むことに着目すると、この愛着行動を受けた対象者（他者）は、「すねた伝達」の行動の主体が求める反応を強いられている感じを抱く可能性がある。これを踏まえると、他者の気持ちや状況を想像するという傾向は、「すねた伝達」をしたと想定した場合に行動を受けた対象者（他者）が抱くと思われる不快感をも想像する可能性を含むと考えられる。このため、「すねた伝達」は、他者の気持ちや状況を想像する「気持ちの想像」と負の関連がみられたのだと考えられる。

4.1.2 「気持ちの想像」から「他者への懸念」

「気持ちの想像」から「他者への懸念」には正のパスが示されたため、仮説1「気持ちの想像と間接的愛着行動とが正の関連を持つ」にあてはまる結果が示された。「相手に迷惑がかかる」「イヤな顔をするかもし

れない」など、愛着行動を受ける対象が、自身の行動によってどんな状況に置かれるかを想像するほど、「他者への懸念」という愛着行動の抑制につながるのだと考えられる。そのため、「他者への懸念」は、相手の気持ちや状況を想像する「気持ちの想像」と正の関連が見られたのだと考えられる。

4.2 仮説2について一間接的愛着行動を媒介する変数の関連はどのようなものか

「すねた伝達」を媒介するストレスの認知的評価の流れについては、「対処効力感①」から負のパス、「脅威①」から正のパスが「すねた伝達」へと示され、「すねた伝達」からは正のパスが「対処効力感②」に示された(3.4.1)。そして、「他者への懸念」を媒介するストレスの認知的評価の流れについては、「対処効力感①」から負のパス、「重要性①」から正のパスが「他者への懸念」へと示され、「他者への懸念」からは負のパスが「重要性③」に示された(3.5.2)。これらのことから、仮説2「間接的愛着行動を行う前のストレスへの認知的評価が、間接的愛着行動を媒介し、その後のストレス状況への認知的評価や間接的愛着行動に対する認知的評価の間に否定的な関連をもつ。」は部分的に示されたといえる。以下、「すねた伝達」と「他者への懸念」それぞれを媒介する流れについて考察する。

4.2.1 「すねた伝達」を媒介する流れ

間接的愛着行動である「すねた伝達」からは後のストレスの認知的評価に肯定的な意味を持つパスが示され、仮説2「間接的愛着行動を行う前のストレスへの認知的評価が、間接的愛着行動を媒介することで、その後の認知的評価に否定的な関連を生じさせる。」とは異なる結果となった。パスは「対処効力感①」「脅威①」→「すねた伝達」→「対処効力感②」と示された。「ストレス場面に対する認知的評価」においては、「すねた伝達」に対し、ストレス場面を自分で解消できると思う傾向（「対処効力感①」）が負の関連を、またストレスを脅威と感じる傾向（「脅威①」）が正の関連を示したが、「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価」においては、「すねた伝達」が、ストレス場面を自分で解消できると思う傾向（「対処効力感②」）に正の関連を示した。これは、間接的愛着行動の前においてはストレスに対して脅威であると認知するほど「すねた伝達」を行いやすく、一方で、ストレスに対して対処可能であると認知するほど「すねた伝達」を行いにくいことを示唆している。そして、間接的愛着行動の後では、「すねた伝達」を行うほど、

ストレスを対処可能と認知する傾向に向かうことを示唆している。本研究では、間接的愛着行動が間接的に安全欲求を表現する行動であることを踏まえ、安全欲求が伝わらない結果、かえってストレスの否定的な認知を強めることを想定した。しかし、「すねた伝達」を行うことは、ストレス場面への対処効力感を強める結果となった。このことは、何を意味するのだろうか。

「すねた伝達」は、4.1.1で述べたように、アサーティブに不満を伝達できない愛着行動である。この点より、「すねた伝達」は不本意的な愛着行動であると考え、うまく不満を伝えられないということとストレス場面に対する否定的な認知との関連を想定した。しかし、甘えの要素を持つ「すねた伝達」によって相手の反応を引き出すことで統制感が高まり、ストレス場面に対する対処効力感をも高めることができると考えられる。このことから、「すねた伝達」はアサーティブではない伝達方法であるとしても、ネガティブ感情を解消する愛着行動としての役割を持っているといえる。そのため、相手の反応を引き出すような「すねる」「ふてくされる」「八つ当たりする」といった不満の表現が、ストレスへの肯定的な認知を高めた結果になったのだと考えられる。

4.2.2 「他者への懸念」を媒介する流れ

間接的愛着行動である「他者への懸念」からはその後のストレスの認知的評価に否定的な意味を持つパスが示され、仮説2「間接的愛着行動を行う前のストレスへの認知的評価が、間接的愛着行動を媒介することで、その後の認知的評価に否定的な関連を生じさせる。」にあてはまる結果となった。パスは「対処効力感①」「重要性①」→「他者への懸念」→「重要性③」と示された。「ストレス場面に対する認知的評価」においては、「他者への懸念」に対し、ストレス場面を自分で解消できると思う傾向（「対処効力感①」）が負の関連を、またストレスを重要と感じる傾向（「重要性①」）が正の関連を示したが、「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価」においては、「他者への懸念」が、ストレスを重要と感じる傾向（「重要性③」）に負の関連を示した。これは、間接的愛着行動の前においてはストレスに対して重要であると認知するほど「他者への懸念」を行いやすく、一方で、ストレスに対して対処可能であると認知するほど「他者への懸念」を行いにくいことを示唆している。そして、間接的愛着行動の後では、「他者への懸念」を行うほど、間接的愛着行動に対するストレスを重要と認知しない傾向に向かうことを示唆している。このことは、ストレスを、重要なものと認知する傾向によ

て、ストレスに伴うネガティブ感情を、他者に頼っても直ちに解消すべきものとは認知していないことともいえる。そのため、「他者への懸念」との正の関連が生じ、自分のネガティブ感情を解消するための行動を積極的に行わない可能性も考えられる。自分の愛着行動の結果に対して重要であると認知しないということは、「他者への懸念」を行うこと、つまり対他調整のために愛着行動が抑制されることを、自分にとって重要であるストレス場面とは認知しないことを示唆していると考えられる。また、「対処効力感①」から負のパスが示されたにも関わらず、「他者への懸念」から「対処効力感②」および「対処効力感③」へのパスが示されなかったことについては、「他者への懸念」はストレス場面への対処効力感を高めるとは言えず、成人の愛着行動の役割であるネガティブ感情の解消を果たせない可能性が考えられる。

5. 総合考察と今後の課題

本研究では、「気持ちの想像」が間接的愛着行動を媒介して、ストレスの認知的評価との間にどのような関連をもつのかについて検討した。その結果、「気持ちの想像」は間接的愛着行動の2因子それぞれに正負の異なる関連を示し、間接的愛着行動の2因子それぞれとストレスの認知的評価との間にはさまざまな関連がみられた。「気持ちの想像」は、間接的愛着行動である「すねた伝達」に負のパスを示し、もう一方の「他者への懸念」には正のパスを示した。そして間接的愛着行動の「すねた伝達」は「間接的愛着行動を行った後でのストレス場面に対する認知的評価」の「対処効力感」を高める結果となったが、もう一方の因子である「他者への懸念」は「間接的愛着行動を行った後での間接的愛着行動に対する認知的評価」における「重要性」を減ずる結果となった。「気持ちの想像」やストレスへの認知的評価との関連において、間接的愛着行動の2因子の特徴がそれぞれ示されたことは今後の間接的愛着行動の検討に役立つといえるが、本研究には課題も挙げられる。第一に、ウェブ上のアンケートと紙媒体の質問紙を併用させて回答を集めたことで、データの均質性が損なわれた可能性がある。第二に、教示文の問題がある。Q4、Q5でストレス場面（Q4：Q2で想定したストレス場面に対して、Q5：Q3で行うと想定した行動の結果に対して）を区別して回答を求めたが、回答者にとって十分に伝わる教示ではなかったと考える。また、場面設定をしてもらったあとで、そこで想定する行動や、行動の結果に対しての認知的評価を回答するという構成は煩雑な思考を求めた

め、インタビュー調査や自由記述といった調査方法の工夫が必要であった。また、間接的愛着行動の結果をストレス場面であることを前提とした教示になっていたことも、回答を困難にさせた可能性がある。教示や質問紙構成、また調査方法についても吟味する必要があるといえる。第三に、本研究では愛着行動の対象として特定の他者を設定しなかったが、調査対象者が想定する他者によって、間接的愛着行動の生起の想定は変容すると考えられる。愛着行動を想定する場面をより具体的に提示することで、間接的愛着行動がもつ特徴をより深く検討することができるだろう。

付記

本論文は2020年に卒業論文として愛知教育大学に提出したものを加筆・修正したものです。本論文の執筆にあたり、指導教官の原田宗忠先生をはじめとする多くの皆様にご協力、ご支援のほどを賜りました。心から御礼申し上げます。

文献

- 土井隆義 (2008). 友だち地獄. 筑摩書房.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証. 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 加藤 司 (2007). 対人ストレス場面における認知的評価, コーピング, 情動の関連性について. 健康心理学研究, 20, 2, 18-29.
- 中尾達馬・加藤和生 (2001). 成人の愛着行動とはどのようなものか?—女子大学生の自由記述の内容分析を通して—. 九州大学心理学研究, 2, 99-106.
- 中尾達馬・加藤和生 (2006). 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか? パーソナリティ研究, 14, 281-292.
- 登張真穂 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元視点による検討. 発達心理学研究, 14, 136-148.

(2022年1月8日受稿, 2022年2月2日受理)

心理臨床センターによる COVID-19 パンデミック下での 電話相談事業の報告

総 田 純 次

I COVID-19電話相談設置の経緯

(1) 電話相談開設の経緯

COVID-19は、武漢由来と言われる最初の波のあと、2020年の秋の東京由来の波を除くと、主に世界各地での変異株の流行が国内に持ち込まれる形で波状に感染拡大と収束を繰り返して今日に至っている。2020年3月からのヨーロッパでの変異株によるいわゆる第1波により、同年4月より初めての緊急事態宣言が発出され、大阪府立大学でも学生の登校ほか教職員の出勤も大幅に規制される中、4月中旬から5月末まで心理臨床センターも対面での面接を休止し、電話やオンラインでのフォローアップを余儀なくされた。そうした状況下、パンデミック下でセンターが寄与できる取り組みとして無料電話相談を企画し、4月末にホームページに案内・申し込みフォーマットを掲載して開設した。電話相談後に医療機関や相談機関にリファーする可能性も考え、対象は大阪府民に限定し、予めリファー先のリストも準備した。5月15日に大学広報課からプレスリリースされ、朝日新聞などで記事化されたことを受け、6月には立て続けに相談申し込みがあった。電話相談は当初、センター休室期間限定の予定であったが、広報効果が出たところだったのでそのまま継続することにし、概ね月1～2例のペースで申し込みが続いた。2021年になり、最も感染状況の深刻であった春の第4波、夏の第5波の終息を受け、ワクチン接種が普及したこともあり、10月末で閉じることとした。

(2) 電話相談の手順

相談員がセンター業務の合間に対応する形になるため、「いのちの電話」のように随時対応は無理であり、通常の心理療法と同様、フォーマットを記入してメールで申し込むという予約での相談の形をとった。申込者に都合の良い日時の候補を3つ挙げてもらい、概ね24時間以内に担当者を決めて相談申し込み者に返信し、合意した日時に相談員より非通知で電話する形で実施した。なお継続の相談は行わず、医療機関や相談機関への紹介のためのフォローアップの連絡を除くと、相談自体は1回きりとした。

II 相談件数の推移と感染状況

図1に月別の相談件数の推移を載せる。2020年5月末～6月の計5件は5月15日のプレスリリースによる広報効果によるものである。これを除くと、第1回の緊急事態宣言が明けた2020年7月から10月ごろまでが少なく、11月から翌2021年1月ごろにかけて多くなり、さらに4月に3件と多くなっている。5～6月がゼロ件で8月の3件を中心に夏ごろに3つ目のピークがある。大きくは開設当初の広報効果を除くと、相談申し込み状況は、2020年秋から2021年1月ごろ、2021年の4月ごろ、2021年夏ごろの3回の波状の推移を示している。

これと全国の新規感染者数推移(図2)を比較すると、最初の警戒宣言が解除されてGo ToトラベルやGo Toイートキャンペーンが繰り返された2020年夏

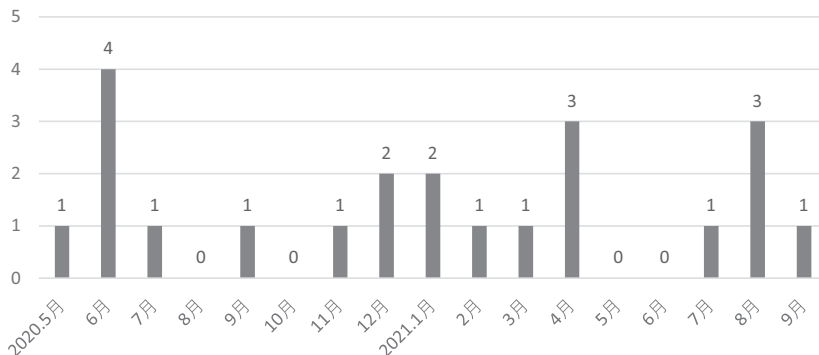


図1 月別相談件数の推移

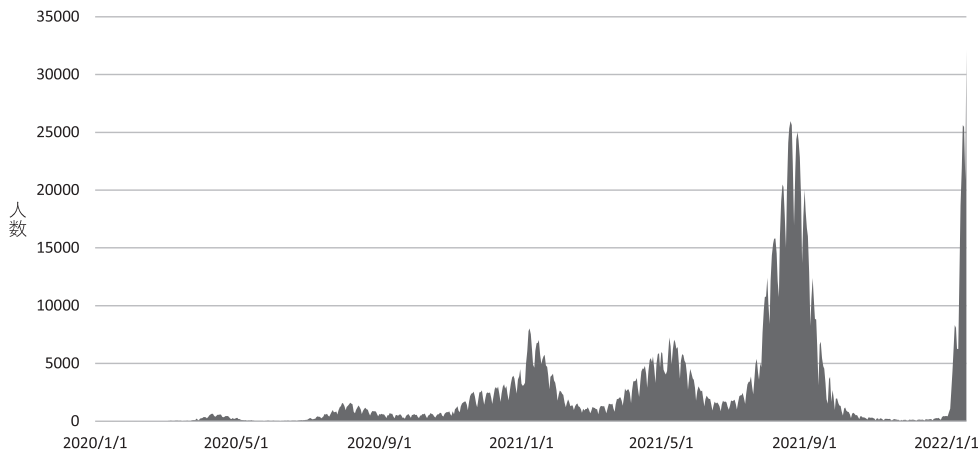


図2 全国の新規感染者数推移
(厚生労働省「データからわかる—新型コロナウイルス感染症情報—」より作成)

から秋にかけては相談件数も少なく、第3波に当たる2020年12月ごろから翌2021年2月ごろまでに相談件数が増え、4月からの大阪で医療崩壊を起こしたアルファ株による第4波に合わせて再増加、5月6月といったん落ち着くも、7月～9月のデルタ株による第5波に合わせて相談件数が増えているというように映る。あとで検討するように相談内容自体は感染症とあまり直結していないものがほとんどであるにもかかわらず、ある程度、感染状況と平行して増減している印象を与える。

Ⅲ 相談者の特性

添付の表1に全ケースの概要を示した。相談申し込み者の性別や年齢層、相談経緯を見ると、性別では男性3例に対し、女性19例である。男性3例はそれぞれ社会的に行き詰った状況での相談になっている。女性では20～30代の独身の若年層と30～50代の子育て世代の母親の相談の2群があり、あとで相談内容に立ち入って分析したい。センターの来談者では、2020年度で54名中20名男性、34名女性と、女性は多いものの男性来談者も相当数あるのに比し、電話相談では圧倒的に女性が多い。もともと母親には子育てや家族関係の悩みが付き纏うので女性の比率が高くなるのは当然であるが、来談者に比しての大きな差が何に由来するのかわからない。受診に至らない母親の潜在的相談希望者を電話相談が拾っているのかもしれない。

相談の経路は、もともとカウンセリングを受けるこ

とを考慮していたものも少なくなく、新聞報道やネット検索で見つけて申し込んだものがほとんどと思われるが、例外的に保健師やスクールカウンセラーから当センターを名指して紹介され、電話相談の存在を知って申し込んだものがある (No.6, 15)。

Ⅳ 相談内容と転帰

男性3件 (No.1, No.14, No.20) はそれぞれ職場環境や家族関係、交友関係で切迫した状況にあり、すでにクリニックの受診歴があったり、他の機関に予約済みであったり、社会的・心理的にも追い込まれた状態である。電話相談後、クリニックや他の相談機関に受診を果たしていると思われ、継続的な診療や相談への橋渡しの役割を果たした形になっている。いずれも感染症パンデミックの影響は少ない。

女性相談者に関しては前述のように2群に分けて考えることができる。1つは20～30代の女性で、以前より人間関係などでの悩みを抱えており、カウンセリングも考えつつ、踏み切れていなかったものである (No.2, No.3, No.4, No.12, No.16, No.17)。原家族での問題を背景に人格的な傷つきを抱えているものが少なくなく、多くは独身である。電話相談は、対面での正式の心理相談への躊躇に対して、お試しの役割を担っており、パンデミックという状況の影響はあまりなく、匿名性の高い電話相談という形態に乗りやすかっただけと考えられる。また転帰もセンターを含む心理療法を勧める形になっており、No.3やNo.12は

表1 心理臨床センター COVID-19パンデミック下の電話相談全例の概要

No.	経路	面接日	担当	性別	年齢	時間	内容	転帰	感染症影響
1		'20年 5月	教	男性	40代	33分	職場ストレスによる鬱	心療内科紹介	あまりなし
2		6月	研	女性	30代	90分	人格病理に基づく不適応	Co 勧めで終了	あまりなし
3		6月	院	女性	20代	50分	人間関係	センター申し込みまで	あまりなし
4		6月	研	女性	20代	50分	出身国の原家族を背景とした人間関係	考えていた Co の方向	あまりなし
5	ネット⇒ 府大	6月	研	女性	40代	65分	咳など心気症的不安を含め全般的不安	センター含む相談機関方向	孤立に影響
6	SC ⇒ 府大	7月	院	女性	40-50代?	63分	高校の娘の不登校	思春期クリニック勧め	あまりなし
7		9月	院	女性	40代	45分	再婚での夫の連れ子との葛藤	心療内科受診方向	あまりなし
8		11月	専	女性	30代?	25分	離婚協議中の3歳児を持つ母親の鬱状態	Co も選択肢	孤立に影響
9		12月	研	女性 姉妹	不詳	50分	姪(姉の子)の不登校・自傷行為・家庭環境	1W後に「心のオアシス」紹介	多少影響?
10		12月	専	女性	30-40代?	35分	離婚した前夫・4歳男児のこと	センター来談	あまりなし
11		'21年 1月	専	女性	30-40代?	40分	4歳娘の特定の友人への独占欲	電話相談のみ	あまりなし
12		1月	教	女性	20代	30分	人格病理(親子関係)に根差した鬱	センター来談	あまりなし
13		2月	専	女性	不詳	メール	男性問題など	受付過程で不感露呈	不明
14		3月	専	男性	40-50代?	60分	酔って娘に暴言、妻より離婚調停申し立て	クリニック受診予定	あまりなし
15	保健師⇒ 府大	4月	専	女性	30代?	40分	集中すると発声する4歳娘の発達相談	Co 勧め	あまりなし
16		4月	教	女性	20代	24分	親のDVや離婚など家族関係を背景とする不随意な泣き	周囲の理解 / Co 勧め	あまりなし
17		4月	専	女性	不詳	90分	夫などへの依存と不信	すでに医療機関。+ Co ?	あまりなし
18		7月	研	女性	30代?	40分	小2の娘の暴力的性場面などの強迫観念	Co 機関紹介	あまりなし
19		8月	専	女性	30代?	50分	スポーツ推薦での高校入学の息子の不登校	息子 / 母親の相談方向	あまりなし
20		8月	研	男性	40代	75分	余命宣告を受けている女友達と連絡が取れず不安・自分の不適応	既に他の相談機関にも予約	あまりなし
21		8月	研	女性	20代?	30分	コロナ後遺症と子育て	途中で切れる	直接
22		9月	研	女性	30代?	44分	高1息子の思春期妄想様訴えと不登校	既に診療所も含め複数の相談	あまりなし

センターでの心理相談申込みに至っている。ただし、もともとの対人関係の問題から心理相談自体への抵抗も強く、No.3は電話申し込みのみで来談に至らず、No.12も開始したものの途中で休止している。なお相談日時設定のための連絡の過程でもともと抱える人間不信が露呈して電話相談に至らなかったNo.13もこの範疇と推定される。

もう一つの層が20歳代～50歳代の母親からの子供に関する相談である（No.6, No.7, No.9, No.10, No.11, No.15, No.18, No.19, No.22）。全相談件数22例中の9例と半数近くを占めており、子育て世代の母親の心理相談のニーズの大きさがうかがえる。主訴は子供の問題の相談であるが、センター来談事例がそうであるように、発達障害やチック、思春期妄想のようにさしあたり子供自身に精神医学的症候や問題行動が現れているもの（No.6, No.11, No.15, No.18, No.19, No.22）から、離婚に関連した子供との関係の問題（No.7, No.9, No.10）のように相談者である母親自身の当事者性の強いものまでスペクトラムになっている。電話相談の転帰にも概ねこのスペクトラムが反映され、子供に現れている問題が精神医学的病態であれば医療機関に、心理的問題の様相が強ければ心理相談機関への紹介の傾向が強い。

この2つの層の中間に位置すると思われる事例も少数ある（No.5, No.8, No.21）。子供を持つ母親で、小さい子供の養育もストレスの大きな要因であることは間違いないが、心気症的不安（No.5）、離婚協議中で鬱状態（No.8）、自身がCOVID-19に罹患して後遺症があり、不安状態にある（No.21）というように、母親自身がサブクリニカルな精神医学的状态に陥っている。また自分が罹患したNo.21も含め、パンデミックによる母親仲間や相談機関との接触の機会の減少に伴う社会的孤立感が強く、それが病的な状態の傾向を強めている。このように今回のパンデミックは、小さい子供を抱えた母親の社会的孤立を強めたという要因を中心に、このグループで最も影響を見て取ることができる。

V 電話相談の様態

相談時間の長さからある程度は窺えることであるが、相談の様態がカウンセリング（心理療法）に近いものと、相談内容を整理し、助言や適切な相談機関を紹介するというマネジメントの面が強いものがあり、これもスペクトラムを成している。どちらの傾向が強くなるかは、もちろん相談内容によるだろう。幼少期の体験に根差した人格の傷つきや病理に基づく

種々の障害や悩みであれば、内容に立ち入れば当然心理療法的になり、長くなる。No.2やNo.17, No.20が該当し、70分や90分という長い相談時間になっている。同時に担当者の志向性も関係しており、同様の相談内容であっても、心理相談を受けることへの抵抗の方を取り上げ、内容そのものにはあまり立ち入らないアプローチを取っているのがNo.4やNo.12である。相談への抵抗を主題化して心理相談機関での相談につなげることを狙ったもので、相談時間も30分、50分と比較的短い。

子供の精神医学的な症状であったり、職場環境であったり、問題が外的なものに位置づけられる事例では、オリエンテーションが明確になりやすく、相談内容を整理して必要な場合には適切な医療機関や相談機関につなげるというマネジメントの面が強くなる。No.1, No.15, No.18, No.19, No.22などが当てはまるだろう。相談時間も比較的短く、30分～40分程度になっている。

今回のような電話相談は、時間枠を設定せずに相談内容に応じて担当者が判断する形になり、また対面の面接と違って話される内容や声の調子だけから対話を進めることになる。初めての接触の機会で、どこまで心理療法的な姿勢で内容に立ち入るのか、マネジメントとして悩みの整理と方向づけを主眼とするのか、この2つの構成要素をどのように組み合わせるのかは担当者に委ねられており、そこに電話相談の難しさがある。それだけに担当者の力量が問われる相談形態だと言えるだろう。

VI まとめ

相談内容から考えて今回のパンデミックが相談に影響していると思われたのは、子育て中の母親で社会的孤立が強くなったことを通じ、母親自身に心身の不調をきたした数例の事例である。それ以外は、自身の人間関係や適応の問題であれ、子供や家族関係の問題であれ、今回のパンデミック以前から続いている問題であることが多く、電話相談という匿名性の高いチャンネルを見つけたので利用したという意味合いが大きいようである。受診に逡巡していたもの、すでに医療機関や相談機関を利用しているが満足できておらず、セカンドオピニオン的に利用したものなどがある。ただし、相談申し込みと感染症拡大に伴う社会全般の不安とは並行した経過を示しているようにも思われ、社会の緊迫した空気が相談の後押しをしている可能性もあるだろう。いずれにせよ、今回の当センターの電話相談は、今回のパンデミックに起因する何らかの困難と

いうよりも、以前より抱えている問題の相談が大半であったため、電話相談の利便性や匿名性を利用して継続的な診療や相談につなぐという役割を担ったものと考えられる。

文献

厚生労働省 (2020-)。データからわかる—新型コロナウイルス感染症情報—。 <https://covid19.mhlw.go.jp/extensions/public/index.html> (2022年1月19日)

(2022年1月15日受稿, 2022年1月29日受理)